

ACEF スタディツアー

2025年 夏 報告書



STメンバー紹介

さつきさん



ACEFの事務局長
みんなのお母さん
的存在！！
辛いものにめちゃく
ちや強い！

とびさん



今回のツアーリーダー
ハイテク機器を駆使してく
れて非常に助かりました

きぬさん



今回のサブリーダー
面白くて明るい、頼れ
るお姉さま！！
準備してくれた手作りの
けん玉が子どもたち
から大人気！

さきの



ベンガル語と英語の
二刀流で大活
躍！！
歌もうまくて、大尊
敬！！

ありさ



冷静で、クールビュー
ティー！！
自撮りをねだられる率
100%でモテモテ！

ななせ



ネトロコナのさつま
いもクッキングでは
大活躍！！
テキパキしてる仕
事デキさん！

STメンバー紹介

まお



ACEFYOUTHの尊
厳プログラムで活
躍中！！
聖歌隊できたえら
れた素晴らしい美
声の持ち主！

りょうこ



今回が二回目のスタツア
参加！ネトロコナの雨漏
りしているBDPスクールを
見て、ACEFYOUTHに入
ることを決意！！

さく



マジックを披露し、
BDPの子どもたちや
スタッフまでがくぎつ
け！！みんなの人気
者！

みらい



マイペースで独特の
世界観の持ち主
今回のスタツアで将
来の方向性がきまっ
たかも、、、

しいか



天然で、持ってきてくれた
ハチミツで辛いのが苦手
な人を救ってくれた救世
主！

みさき



すごい体力の持ち
主！バングラでもト
レーニングは欠かさな
い☆

BDPスタッフ紹介



ヘモントさん BDP事務局長
歌が上手で、英語でたくさん話しかけてくれて、家族を紹介するのが大好き♡



ディコさん プログラムコーディネーター
音楽と奥さんを愛し、面白くてチャームングなお人柄の持ち主！



オモルさん プーバイルのエリアマネージャー
いつもニコニコしていて癒しキャラ！
「ご飯ですよ」が口癖



プロカッシュさん マイクロファイナンス担当のクレジットスーパーバイザー
歌、楽器、ダンス全てが上手！奥さんを彼女と紹介するのは鉄板ネタ！



ラハジさん スーパーバイザー
普段の声質とは違い、低くていい声で歌ってくれる！

ニキルさん 専属ドライバー
全幅の信頼を置かれているドライバー！素敵な笑顔の持ち主 ✨



アリさん
食事の準備をしてくれていて、今回のスタツアではキレイのダンスを披露してくれました！！



ネトロコナスタッフ



ハビブさん ネットロコナ
のエリアマネージャー
強面だが、誰かの足が
汚れたら川で洗っている
時に支えてくれた優しさ
の持ち主！



ヤシンさん
ネトロコナの事務所に家族で住
んでいる。息子のファイザン君
はみんなのアイドル！

ジャマルプールスタッフ



モクレスさん
ジャマルプールエリアマネージャー
天候の悪い日が続いた中みんなが心地よ
く過ごせるようさりげないきめ細やかな気遣
いが嬉しかった。配られた毎食のメニュー
表の文責がモクレスさんでほっこりした。毎
晩ダイニングテーブルで寝ていたので申し
訳なかった。

ラジャックさん
ジャマルプールで毎食後 Teaを出してくれた
キーパーソン、ラジャックさん！みんながロス
になるほど、あやとりや折り紙で楽しませてく
れた。娘さんを溺愛していて、
何回も写真を見せてくれる♡



バングラデシュについて

バングラデシュは南アジアに位置し、インドやミャンマーと国境を接し、ベンガル湾に面する国です。北緯20～26度の熱帯モンスーン気候に属し、豊かな水と緑に恵まれています。

公用語はベンガル語で、国名は *Bangla* (ベンガル人) と *desh* (国) に由来し、「ベンガル人の国」を意味します。人口は1億7千万人を超え、世界でも有数の人口密度を誇ります。



かつてはインドの一部でしたが、1947年にイギリスから独立する際、ヒンドゥー教主体のインドと分かれて東パキスタンとして誕生しました。その後、1971年の独立戦争を経て現在のバングラデシュとなり、現在は人口の約9割がイスラム教徒です。

「アジアの最貧国」と言われてきた時代もありましたが、近年は経済成長が著しく、縫製業を中心とした産業の発展により、貧困率や識字率は大きく改善傾向にあります。1990年代以降は初等教育の普及が進み、女子の就学率も大きく向上しました。農村地域ではNGOによる支援が広がり、農業や教育を通じて人々が主体的に暮らしを豊かにする取り組みが見られます。

また、バングラデシュの人々は母語であるベンガル語への誇りが高く、詩や音楽、舞踊などの豊かな文化が生活の中に息づいています。特に『国際母語デー』の起源は1952年のバングラデシュにあり、言語を守ろうとした運動は今も国のアイデンティティとして大切にされています。

首都ダッカでは活気ある市場や建設中のビル群が立ち並び、人々のエネルギッシュな姿があふれています。一方、農村では広大な田園風景や水辺の暮らしが広がり、自然と共に生きる人々の姿を見ることができます。

多彩な文化、力強い人々、そして着実に進む発展。これらすべてがバングラデシュという国の魅力を形づくっています。

ACEF紹介、BDP紹介



特定非営利活動法人アジアキリスト教教育基金(The Asia Christian Education Fund: ACEF)は、1990年に船戸良隆氏と故ミナ・マラカール女史によって設立された国際協力NGO・NPO法人です。キリスト教精神に基づいてバングラデシュの子どもたちの初等・中等教育支援と職業訓練のための支援協力を行い、教育・福祉の向上に貢献して今年で35年を迎えます。

国内の活動では、国際協力イベント、バザーでの工芸品の紹介やサービスマニシング学生の受け入れ、対面／オンライン開催でバングラデシュにまつわるイベントを行います。さらに、開発途上国の諸問題に取り組む日本の若者の育成を行い、我が国の国際協力教育の促進を図ることを目的としています。例えば春と夏の年に2回実施しているスタディーツアーや、高校生大学生を中心に構成されたACEFYouthによる盛んな活動が挙げられます。

また近年ACEFではヴィジョンである「尊厳」について積極的に取り組んでいます。幅広い世代にワークショップやイベントを開催などを通して尊厳を広める活動を精力的に行っています。

ACEFのパートナーであるBDP(Basic Development Partners)は1990年に故ミナ・マナカール医師によって設立された国際NGOです。彼女は生涯を通じて、少なくとも初等教育なしにはいかなる発展も不可能であることを痛感していました。そこで彼女は日本の船戸牧師と協議し、教育分野で協力するという新たな構想に合意し、「すべての子どもに読み書きを」を理念にノンフォーマル小学校の運営を始めました。現在はバングラデシュの首都ダッカのスラム地区と農村部を合わせた6地域、30校のノンフォーマル小学校を運営し、3,100人強の子どもたちが学んでいます。また、コミュニティの女性を積極的に教員として採用したり、主に子どもたちの母親を対象としたマイクロファイナンスを展開し、女性のエンパワーメントにも取り組んでいます。更には職業訓練コースも運営し、子どもと女性を積極的に支援しています。また、ACEFはBDPとの関係を、あくまでもCo-worker(共働者)だと位置づけており、「援助」ではなく「共働」であることが前提にあります。



8月10日深夜3時ごろ、プーバイルにあるBDPの寮に到着した。ウェルカムドリンクとしてミルクティーとネクサスのクラッカーをいただき、このスタディツアーの幕が開けた。長旅の疲れを癒す間もなく、翌日に備えてすぐに就寝した。

朝ごはん

わずか3時間ほどの睡眠の後、朝食を取った。メニューはジャガイモをふんだんに使った野菜カレー、チャパティ、バナナ、そして再びお茶であった。



神父の家に向かう途中、隣接する女子校の生徒たちがベランダから身を乗り出して手を振ってくれた。こうした素朴で温かな人々のふるまいは、先進国を旅している中ではなかなか得難いものであり、その違いについて思わず考えさせられた。



日曜礼拝

その後、近くのカトリック教会で日曜礼拝に参加した。神父による説教と祈りの合間に聖歌が歌われ、ハルモニウムで奏でられる独特のベンガル音階が、この地に到着した実感をより鮮明にしてくれた。礼拝後には教会オフィスで再び甘いミルクティーとお菓子が振る舞われ、温かく迎え入れられた。



その後は、もう一軒、教会付近のクリスチャンホームのお宅にお邪魔した。彼は家具職人だと話しており、ここでも恒例のミルクティーとお菓子を頂いた。

昼食では、この旅で初めての本格的なバングラデシュ料理を味わった。チキンカレーと米、そしてデザートにはバングラデシュの象徴的なフルーツ、マンゴーだった。私は、同じくベンガル語圏のインド・コルカタへの留学経験があったが、その時のベンガル料理には強いスパイスの印象を持っていたが、実際にはまろやかな味わいで大変美味しかった。



オリエンテーション

食後にはヘモントさんよりBDPの活動についてのオリエンテーションを受けた。過去の歩みから今後の展望まで多岐にわたる詳細な説明は印象深く、彼の活動への情熱が強く伝わってきた。

お買い物



午後は近くのバザールを訪問した。色鮮やかなサリーが山のように積まれた店先は美しく、場全体が活気に満ちていた。人々はフレンドリーで、賑やかに言葉を交わす様子が印象的であった。

夕食

夕食は魚のカレー、オクラやナスを使った野菜料理、そしてデザートにはパイナップルであった。この食事の際、Amalさんとお話していて、彼の「thini (砂糖) problem」(おそらく糖尿病?) についての話を聞いた。彼によれば、バングラデシュでは多くの人々が同様の問題を抱えているという。



その後、夕拝とシェアリングの時間をもち、一日の活動を終えて就寝した。スマートフォンに依存しない一日は久しぶりであり、非常に有意義に感じられた。東京での生活がいかに慌ただしく、どこか過剰であるかを改めて考えさせられる一日でもあった。

8/11 2日目

朝食を終えて、前日に調達した素敵なサロワカミューズを早速着用し記念撮影。

午前と午後に一校ずつBDPスクールを訪問しました。
どちらの学校でも到着するとすぐにお花をプレゼントしてくれ、心のこもった歓迎に思わず笑顔がこぼれるほど嬉しい気持ちになりました。

子どもたちと一緒に「大きな栗の木の下で」などの歌を歌ったり、折り紙を楽しんだりして、あっという間に距離が縮まりました。

午後に訪れた学校では、シャボン玉やマジックショーに加えて、さらに大勢の子どもたちと校庭いっぱいに広がって鬼ごっこを楽しみ、大きな笑い声に包まれました。

マイクロファイナンスを利用している家庭や仕事場を訪問し、そこでの実際の取り組みを見学しました。
特に印象的だったのは、廃棄された布を再利用してコットンをつくる活動について伺ったことです。

限られた資源を工夫して活かす姿からは、生活をより良くしようとする強い意志と創意工夫が伝わってきました。



8/12 ネットコナ1日目

この日からはAチームとBチームに分かれてそれぞれの場所に向かいました。行くまでに4時間ほどと言われていたのですが、渋滞や道の洪水があり倍の8時間もかかりました。洪水などの日本では見られない様子に大変驚きました。御手洗でとても感動とともに心が温くなりました。着くまでの時間はみんなでお話したり、折り紙を折ったり、ずっと爆笑して凄く幸せで楽しい時間でした。御手洗は少し大変でした。寄って貰った御手洗は今までには見た事のないものでした。



1日目は遅めの昼ごはんのあと22時くらいにほぼ夜食の夜ご飯を食べました最初カレーなどを食べた時、
バングラデシュにはこんなに辛くない料理があるのだととても驚きました。私たちの為に合わせて作っていただいと知りとても嬉しかったです。全部の料理が忘れられないくらい美味しかったです。その後は同じ場所に住む子どもと触れ合って楽しみました。濃い1日でした。

8/12 ジャマルプール1日目

今日から2チームに分かれての活動がスタート

車で5時間かけて、ジャマルプールへ向かい、

車内から、市場や田んぼ、畑の景色を楽しみました。



BDPスタッフの方々がクッキーやアイスクリームなどを用意してくだしました。



都市部には高い建物もたくさんあるのが見えました。



一年前の学生デモの時に描かれた壁画



横断歩道はなく、皆車の間をぬって、道路を渡るのですが、事故は少ないそうです。



無事にジャマルプールに到着し、待っていたBDPスタッフの方々が温かく迎えてくださいました。お昼はチキンカレー、夜はバングラデシュの国魚イリッシュのカレーをいただきました。

8/13 ネットコナ2日目



ジェレパラBDPスクール

オートリキシャに乗って行きました。
子どもたちは、徒歩や船で学校に通っています。
教室のひとつは、サイクロンの被害を受けて屋根が壊れていました。そのため、床が水浸しになっていて使えなくなっていました。



ソアリカンダBDPスクール

ネットコナのBDP事務所近くの学校です。
生徒の多くはヒンドゥー教徒なので「ノモシュカル」とあいさつしました。
青山学院初等部の子どもたちの絵手紙を紹介し、日本から持ってきた干し芋を食べてもらいました。綺麗な学校図書館もありました！



さつまいもクッキング

先生2人と生徒4人が事務所に来てくれて、一緒にさつまいもきんとんとさつまいもチップスを作りました！
さつまいもを茹でている間は折り紙でコマを作って遊びました。

先生と生徒が帰った後は、食事をいつも作っている女性と一緒にクッキングしました！



8/13 ジャマルプール2日目！！



朝から大雨の中、バスに乗り込みまず一つ目の学校へ。午前中に訪れた学校では、黒板の横に牛、鶏、ヤギの絵が描かれていた。豚の絵は見当たらず、宗教的な背景がこうして視覚的に現れていることに気づいた。牛のおもちゃを使って英語を教えている先生の姿が印象的で、子どもたちも楽しそうに学んでいた。子どもたちはとても元気で、授業中に手を挙げる文化が根づいているようだった。学ぶことへの意欲が伝わってきて、こちらまで嬉しくなった。

午後に訪れた別の学校には、短い時間ですが台車のような乗り物に乗って向かいました。思っていたよりもスピードが出てとてもおもしろかった。学校では、児童の数がとても多くて驚いた。きらびやかな服を着た女の子たちはまるでお姫様のようで、歓迎のダンスもとても優雅だった。図書館に入ったとき、蔵書の少なさに少し驚いたけれど、『長くつをはいた猫』や『アラジン』など、知っている絵本が何冊かあって、日本や世界の物語がここにも届いているんだなと思ってしみじみした気持ちになった。



その後の活動では、現地の子どもたちと一緒にサツマイモを使ったクッキング体験を行った。材料はシンプルで、調理工程もそれほど複雑ではなかったけれど、英語で説明しようとしても、相手の子どもたちは英語をほとんど理解していない。こちらも現地の言葉は分からない。言葉が通じないことの難しさを痛感した。英語でもなかなか伝わらず、ジェスチャーも限界があつて、言語の壁の厚さを改めて感じた。しかし現地の方の翻訳や、身振り手振りで何とかおいしいサツマイモお菓子を作ることが出来た。

何もかもが新しいことだらけで大変なこともたくさんあったけれど、全部が楽しくて、どれもかけがえのない経験になりました。

8/14 ネットコナ 3日目！！

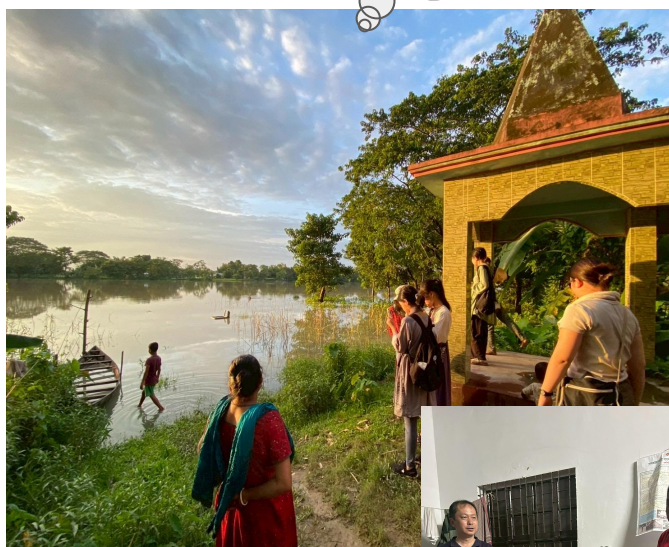


学校訪問！
水の上にある！

魅力しかないバングラデシュ
言葉では言い表せない！



綺麗！



HBD！
たのしい、美
味しい



8/14 ジャマルプール 3日目

全校で100人程度の小さな学校に訪問しました。

午前中なのでプレ、1年生、2年生が紙でつくられたお花でお出迎えしてくれました。授業見学、ボロボロガーチェの後に前夜から内職した「紙コップけん玉づくり」をみんなでした。クラスの前で1人1人がエタ、ドウコ、ティン！（1、2、3！）と披露してくれました！これが大成功！景品に渡したカエルの折り紙でも楽しんでくれました。

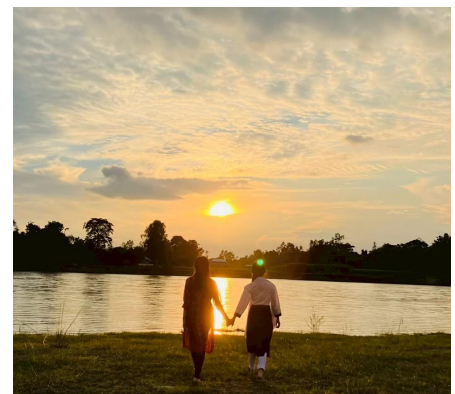
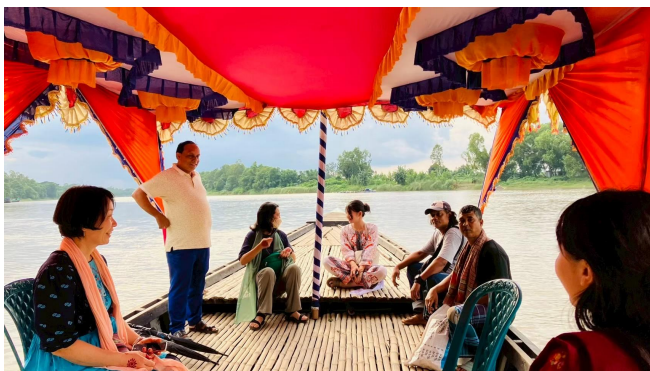
晴れていたなので、お外でビーチボールやシャボン玉でも遊ぶことができました。卒業生のお姉さんたちとも沢山写真撮りました。



午後から、ジャマルプールチームはフライングカルチャーショーがありました。BDPスクールの先生と卒業生が来てくれて、沢山沢山かわいがってくれました♡

まずはクジャクみたいなゴージャスなサリ(=バングラデシュの女性の一張羅)を着つけてくれました。サリは何層にも重なっていて、複雑な着つけをきれいに保つのが難しかったです。

次にヘナタトゥーを描いてもらいました。写真を見ながらフリーハンドで超綿密な柄を描いてくれて、感動！！15分後に水でこすると赤く色づいていました。



ダッシュで着替えてボートトリップへ！ディコさんに「今日は雨だよ」「午後は雨だよ」と言われていたのですが天候に恵まれて無事ボートトリップは決行！船上では楽器で遊んだり、いつものおいしいビスケットをいただいたり、みんなで楽しく過ごしました。

夕日が綺麗に見えるころ、野原に下船してみんなで映えるエモい写真を撮って、素敵なひとときとなりました！何も考えずに静かに、みんな夕日にうっとり♡していたら、日も沈み暗くなりかけたところ急に船のエンジン音が消えた！船が止まった！なんと、燃料切れでボートが立ち往生してしまったのです...これぞバングラデシュ！！面白い！！30分、真っ暗闇の中で燃料が届くのを待ちました(さくちゃんがなぜかランプを持っていて大活躍でした☆)

8/15 ネットロコナ 4日目

ネットロコナを出発して、ジャマルプールチームとテゼで合流するのが主なスケジュールでした。

ネットロコナスタッフのヤシンさん、ハビブさんと最後に記念撮影。初日はどうなることかと思ったけど、問題が起きるたびにネットロコナの人たちの優しさを感じ、虫如きで騒いで申し訳ない気持ちでいっぱいです。名残惜しく、寂しいお別れの時間を過ごしました。



4時間かけてテゼに到着！ジャマルプールチームは小一時間で着いたらしく羨ましい限り！到着したら、甘いレモングラスティーと分厚くて固いクッキーでおもてなしてくれました。美味しかったー❤️ ギヨムさんと英語、ベンガル語、日本語の賛美歌を計4曲練習した後、ラファエロさんがテゼを案内しようとしてくれました。しかし、池の上に建っている小屋のうさぎを見せてくれようとした時、さつきさんとラファエロさんが小屋と地面をつなぐ板の上に乗ったら、バリバリバリといい板が割れ、2人が落ちてしまう一大ハプニングが起きました。ひと息ついた後テゼの昼の礼拝をテゼの共同体で暮らしている子どもたちと一緒にまもりました。

テゼでの礼拝は信仰や神様の力を改めて感じ、自分と向き合うことができた神秘的なひと時でした。その後個人的にはスタツアの中で1番辛く感じたカレーを蜂蜜をかけて完食しました。昼食を食べた後、プーバイルの事務所へ出発！ここまで付き添ってくれたモクレスさんともお別れしました😭



4時間かかってプーバイルの事務所に着！夕食前に事務所の近くでバングラデシュの映画かドラマの撮影をしていたので、見学しに行きました。結婚式のシーンで女優さんも俳優さんも綺麗な民族衣装を着ていました。夕食はチキンカレーでネットロコナのカレーよりは少し辛め。デザートのパイナップルも美味しかった。



8/15 ジャマルプール 4日目

バナナやゆで卵の朝食をいただいたあと、お茶を楽しんでから、お世話になったスタッフの方々とお別れをしました。滞在は短いものでしたが、朝から夜までたくさんの面白いお話や写真を見せていただき、とても親しく接して下さったことが心に残りました。



テゼには予定より早く到着し、レモングラスティーとビスケットを頂きました。

また、長らく活動されてきた神父さんとバングラデシュの豊かさとは何かについてお話したり、歌の練習を行いました。

テゼからの帰り道では、山のように積まれたパイナップルやずらりと並んだ工事用機械、薬局や病院の数の多さが目に入りました。地域ごとに、それぞれの仕事や暮らしが形づくられているのだと感じました。



8/16 shopping day

9時にバングラデシュの高級デパートAarongへ出発！警備が厳重なことに驚きました。一階はサンダル、バック、ピアス、ネックレス、ブレスレットなどのアクセサリー各種、スキンケア用品売り場でした。2階はサリーやサロワカミューズの女性服売り場、3階は子ども用品。ユニコーンのぬいぐるみなどが売っていて改めて貧富の格差を感じた。4階は寝具や食器などの雑貨売り場、5階にはパンジャビなどの男性服、6階にはオシャレカフェと洋服屋さんがありました。冷房、エレベーターがあり、トイレも試着室も非常に綺麗でした。そんなAarongでも中学生くらいの女の子が清掃員として働いていたのが印象的でした。

みんなでショッピングを満喫した後に、スーパーでお菓子や茶葉などのお土産を買いました。そのスーパーは英語ができる定員さんが多いのとTAX Freeだったのが助かりました。私はお目当てのマンゴーバーをゲットすることができました。スーパーのある建物内で何回か「你好」と話しかけられたのが印象的でした。



オモルさんご自宅に訪問



昼食後にオモルさんのお家に訪問しました。外観は水色で十字架のついたキレイなお家でした。家族、親戚一同でおもてなししてくださり、太鼓やタンバリンでバングラデシュの歌のリズムを刻みながら歌ってくれました。プロカッシュさんとオモルさんの奥さんがリードボーカルで2人ともめちゃくちゃ歌が上手かったです。演奏が終わった後、ミルクティーとカレー味の焼きそばを振る舞ってくれました。焼きそばの付け合わせのスパイシーなトマトケチャップが美味しかったのが意外な発見でした。リビングに飾ってあったオモルさんの若い頃の写真に時の流れを感じました。めちゃくちゃ居心地のいいお家で気がついたら日がくれる時間になっていました。オモルさんの奥さんがイキイキしているように見えて、仲が良く素敵な家族だと思いました。

8/17

今日は日曜日！

なのでオモルさんが通っているカトリックのバドゥチャーチの主日礼拝に参加しました。

途中大雨で停電したけれど、もうここにきて1週間、慣れました！



その後はスラム街のBDPスクールを訪問しました。墓地の中にあってびっくり、、、

最初にユーグレナの方にお会いし、「スラム街の子たちは栄養が足りていないものばかり食べているのでユーグレナビスケットが必要」とレクチャーを受けました。授業見学では、理科の風の話をしていました。この学校は日本人慣れしていて(!)、子どもたちが「大きな栗の木の下で」「幸せなら手をたたこう」を流暢な日本語で披露してくれて腰が抜けそうでした。



2つ目の学校はビルの中にありました。日本とバングラデシュの国旗でお出迎え。折り紙をしたり、けん玉を作ったりして遊びました。その後、縫製の職業訓練生にもお会いし、かわいいハンディクラフトを見せてもらいました。



お昼はBDPオフィスでカレーをいただきました。みんな辛い辛い言っていたましたが、私はこのカレーが上位で好きでした♡



帰ったらすぐにカルチャーショー！みんなピンクのサリを着つけてもらって、ヘナタトゥーを描いてもらって、楽しみました。BDPスクールなどから来てくれた子どもたちが私たちのためにダンスや歌や詩の朗読を披露してくれて、私たちはメロメロ♡尊かったです。ハイライトは、いつも私たちに食事をサーブしてくれるアリさんのキレイなダンス！意外な一面でした！私たちは「花」と、手紙(伴奏ディコさん)を披露しました♪みんなでルンギダンスではしゃぎ、楽しく終了しました～！

8/18

実は昨晚から、体調不良者が多くオモルさんの旧友のカトリックの宿泊施設で過ごしています。クーラーのついた部屋、温水の出るシャワー、ふかふかのベッド。最初から整った設備のここが拠点でスタディーツアーが行われていたら？と考えました。



元気な人たちで近くのBDPスクールを訪問しました。私たちのクラスでは折り紙でパックンチョを作りました。晴れていたなので、念願の！外遊びをしました！エビカニクスと一緒に踊ったり、ビーチボールやシャボン玉で遊びました。



10日間の総括！ラストミーティング！円になって人ずつ感想をスピーチしました。BDPスタッフからは、実際にバングラに来る意義について考えさせられるお話をもらいました。

夜、BDPスタッフたちとお別れをして、空港に向かいました。空港までの道がとても混んでいたし、空港も人でごった返していました。深夜便なのに、、、新しいターミナルができるのが楽しみです。

いろいろな事件があったけど、みんな無事に日本に帰ってこられました。「完」

参加者の感想

「強烈な違和感」を大切に

明治学院中学校・明治学院東村山高校 社会科教諭 佐藤飛文

30年前の1995年1月17日、阪神淡路大震災が起きた。その頃大学生だった私は、現地にボランティアに行った。避難所になっていた神戸市内の小学校で、支援物資の配布などをしながら、空き時間には子どもたちと遊んだ。ずっとここでボランティアをしていたかったが、大学の期末試験があるのでいったん東京に戻ることにした。神戸から大阪に移動したときに、「強烈な違和感」をおぼえた。さっきまで被災地にいた。地震で横倒しになったビルや火災で焼け跡になった市場など、地震の傷跡が生々しく残っていた。神戸市内は電車もまだ動いていなかったし、電気もガスも水道もまだ復旧していないところもあった。しかし、そこから数十キロ離れた大阪では、まるで地震などなかったのよう普通に町が動いていて、普通の暮らしが営まれている。電車も動いているし、電気もガスも水道も普通に通っている。被災地と非被災地の「温度差」に強烈な違和感をおぼえながら、東京に戻った。

スタディーツアーを終えて日本に帰って来て、このような「強烈な違和感」を覚えた参加者もいたのではないだろうか。シェアリングの中で、「これまで当たり前だと思っていたことが当たり前じゃないことに気付いた」と語った参加者がいた。部屋でリモコンのボタンを押せばエアコンがついて涼しくなること、トイレでボタンを押せば自動的に水が出てお尻を洗ってくれること、お風呂でボタンを押せば温かいお湯を湯船にためてくれること、水道の蛇口をひねれば安全な水が出ること、そんな当たり前だと思っていた生活は実は当たり前ではなかったことに気付いたのだろう。「強烈な違和感」を大切にして、自分たちの生活を見直すきっかけにしてくれればと思う。

私にとって今回が3回目のバングラデシュスタディーツアーだった。今回特に印象に残ったのは「若い教師たちとの出会い」だった。ノアパラBDPスクールでは16歳の先生に出会った。彼女は高校卒業してすぐに教師になったそう。ネトロコナチームの椎香さんと美来さんと同じ年だったのでとても驚いた。レックアンディアBDPスクールでは19歳の副校長先生に出会った。茉央さんと諒子さんと同じ年だったのでとても驚いた。チョルリッシュカハニヤBDPスクールでは23歳の先生と出会った。ネトロコナ大学を卒業して教師になった彼女は英語がとても上手で、いつか日本に留学したいとも話していた。このような能力のある若い先生方を応援して行きたいと強く思った。

今回は私の大好きなジャマルプールに行けなかったのは残念だったが、私たちのチームが訪ねたネトロコナはジャマルプール以上に田舎で、素敵な場所だった。しかしジェレパラBDPスクールはサイクロンの被害で校舎が痛んでしまい、雨漏りがしていたり、浸水して使えなくなってしまった教室もあった。帰国後、参加者のみんなと話し合い、新校舎を建てるためにクラウドファンディングを立ち上げることにした。ぜひこの報告書を手にとってくださった皆様にもご協力いただきたいと思います。そしていつか新校舎の建設が実現したら、またネトロコナに行って、新校舎の完成を共に喜びたいと思う。

「はじめてのバングラデシュ、はじめての ACEF スタディツアー」

山梨英和大学 宗教主事 大久保絹

深夜1時、ダッカに到着した。空港も街も人で溢れ、バイクとリキシャが行き交う街を、クラクションを鳴らしながら抜け、宿舎に向かった。明日からどんな出会いと経験が与えられるのだろうと思い描きながら、天井のファンの風で揺れる蚊帳の中、ゴザの敷かれたベッドで眠りについた。

バングラデシュの朝は、ニワトリの鳴き声とスピーカーから流れるアザーン(礼拝の呼びかけ)で始まる。生き物のエネルギーと人々の内にある信仰を感じる「音」であった。バングラデシュでの日々は自然の恵みと厳しさ、人と動物と自然との共生、人々の優しさとたくましさ、こどもたちの元気溢れる笑顔の中にあり、日を重ねるごとに、日本の生活で抱えている緊張や複雑さが解きほぐされていくように感じた。

スタディツアー7日目に訪れたテゼ共同体では、ブラザーとゆっくり話すひと時が与えられた。ブラザーは「Japan is very angry society」と日本社会を表し、「Bangladesh is poor but joyful」と語った。この言葉を聞き、私も日本社会において、angry societyを作る一人になっているのかもしれないと自らを省みた。

バングラデシュの風景の中には、ヤギ、ニワトリ、ウシやイヌが共にあり、目の前に広がる道や自然の多くは人間の手が加えられていない。雨が降るとぬかるみに足が取られ、車ですら進めなくなる。大雨で草原は沼や池になる。それでも人々の暮らしは中断せず、その中で人々は生活している。バングラデシュには文明と文化と技術に覆い尽くされていない世界があり、この中で生きている人々は幸せだと感じる事が何度もあった。私はそもそも雨に濡れたり、泥だらけになったり、自然に親しむことが好きだ。その私がバングラデシュの太陽の光、雨や風や暑さを全身で感じ、太陽の力、土、雨、風が育てた生物を素手で食べる。バングラデシュは、「自然に親しむ」というより、自然がもつ根源的な力を全身で受けとめることができる場所で、そのことが心地よかった。テゼ共同体のブラザーはpoor but joyfulと言ったが、しばしばrich and joyfulではないかと思った。

私が来る前も私が去った後も変わらずにあり続けるだろう風景、生き続けるだろう人々やこどもたちの中で、私も風景の一部に、バングラデシュ的な人になっていることを楽しんだ。また、生きていくのに絶対に必要なものは、それほど多くないということを学んだスタディツアーであった。テゼ共同体のブラザーは「Japan has many possibilities」とも語った。その可能性とは何だろうかとも今も考えている。ACEFと現地パートナー団体BDPとの尊重し合うパートナーシップによって続けられているスタディツアーに参加し、バングラデシュから帰国してからも、出会った人たちのことをたびたび思い出している。そして、いつかまた一緒に踊り、歌い、食べ、祈りを捧げ、その可能性のひとつでも、rich and joyfulな人たちと再び共有することができたらと願っている。

笑顔に導かれた思考の旅

東京外国語大学 国際社会学部 ベンガル語科 4年 種村咲乃

8月9日から19日までの10日間、私はバングラデシュスタディーツアーに参加した。大学でベンガル語を学ぶ者として、大学卒業までには必ず訪れようと決めていた国だった。今回の旅では、首都ダカから車で約45分のプーバイルで4日間、北部インド国境に近いネトロコナで3日間、そしてダカで3日間を過ごした。

ベンガル人の屈託のない笑顔

私がこの旅で最も強く印象づけられたのは、人々の屈託のない笑顔である。外国人が少ないこの国では外国人である私たちが街を歩くだけで注目を浴びる。私たちがその視線に気まずさを覚えつつも笑顔や手振りで応じると、子どもだけでなく大人までもが純粋な笑顔を返してくれる。その笑顔には下心も打算もなく、ただ相手を受け入れる温かさがある。彼らの笑顔を見ていると、こんな純粋な微笑みを見たのはいつぶりだろうか、と思うほどであった。

「問題ない」の精神

もう一つ印象に残ったのは、ベンガル人の口癖、「オシュビダ ネイ (অসুবিধা নেই: 問題ない)」である。私たちがネトロコナの農村を訪れた時、ヒンドゥーのご家庭を訪れた。その貧しい暮らしぶりから彼らが宗教的少数派として抑圧を受けているのではないかと質問したところ、バビブさんからは即座に「オシュビダ ネイ」と一言。そしてイスラム教徒とヒンドゥー教徒は助け合い、調和的に暮らしていると断言していた。その彼の姿に触れたとき、外部者の私たちが抱く問題意識が、しばしば現地の実感とは食い違うことを思い知らされた。そしてきっとこの「オシュビダ ネイ」の精神は、日常の一挙手一投足にとどまらず、混沌とした社会の中で生きる人々を支える生命線として生き続けているようにも感じられた。

富める日本人、貧しいベンガル人

この旅は総じて「富」とは何かを考えさせられるきっかけとなった。

経済大国、日本から来た私たちから見たベンガルの生活は、必ずしも過ごしやすいとは言えない。お湯の出ないシャワー、舗装されていない道、分別されずに腐臭を醸し出すゴミが散乱した道、破れた服を着た人々。生活の条件だけを取り出せば「貧しい」と呼ぶほかない。

現に「エリート」階層の人々はこの国を出て欧米の教育を獲得し、先進国で人生を築く人も多い。私もロンドン留学時代に多くのベンガル人と出会ったが、彼らの中にはバングラデシュの地に一度も足を踏み入れたことのない者もいた。

しかしながら、それは決してベンガルの土地がグローバル化(という名の西洋化かもしれないが)の波に飲み込まれることを意味するのではない、と感じる。私はバングラデシュの彼らの生活の中にある純粋な笑顔と助け合いを見た。それは良くも悪くも文明と資本主義に洗脳された私たちが段々と忘れてしまったような懐かしい喜びにただ体を委ねているように見えた。

この豊かさは今後の経済成長の中で純粋にベンガルの地の特色として残り続けてほしいと真に願う。それは私が憧れてしまう何かでもあった。

「共生」とは

最後に、帰国の途にてダカ空港でディコさんとヘモントさんから昨年起きたバングラデシュでのクーデターの話を知ることができた。彼らによれば昨今の頃は空港がある地区一帯は火炎瓶の火の海で人々は大混乱に陥っていたという。そして、その会話の最後にディコさんが私に放った言葉が脳裏に焼きついた。

「これがバングラデシュのリアルなんだよ。世界はバングラデシュをまるで虫けらのように扱うんだ。」

そうなのか、これが私たちが、彼らが、対峙しなければならないリアルなのか。彼らはそこに生まれ、私たちはここに生まれた。そこにはやるせ無いほど大きなダイナミズムの中で成立してきた不条理が存在する。けれど、だからってそこで屈する彼らなのでも無い。

それならばむしろ命題は、それを知った我々がどう世界と共生していくか、なのであろう。

私は、この問いに対しきっとそれは目の前の不条理に目をそらさず、常に良心を携えて世界と関わり続けることだ、と結論づけた。目の前にある不条理を見てみぬふりをしないこと、人生を遂げて考え続けたい。

目に見えない豊かさと成長を信じる力

国際基督教大学 村内 有沙

バングラデシュで心に残った出来事の一つは、お土産を買うために立ち寄ったスーパーのレジの方との会話です。私がスタディツアーで訪れていると伝えたと、その方は「バングラデシュはもう貧しい国ではなかったでしょう」と、自信をもって話してくれました。その言葉は意外であり、強く印象に残りました。というのも、訪問前の私は、道路の混雑やごみ処理の遅れ、生活インフラの不十分さなど、どうしても課題が多い国というイメージを抱いていたからです。実際に現地では、大量に積まれたごみを食べる牛や、雨が降ればすぐに渋滞する交通状況など、そうした現実を目にしました。しかし一方で、若い世代が自国を「成長している」と誇らしげに語る姿には、前向きなエネルギーを強く感じ取りました。

また、訪れた学校では、先生も生徒も授業に非常に熱心で、教室全体が活気にあふれていました。限られた教材や設備しかないにもかかわらず、生徒たちは積極的に発言し、先生も力強く応じていました。そこには教育を通じてより多くの可能性を追求したいという意志が表れており、人々の成長への意欲が社会の発展を支える基盤になっていることを理解するきっかけとなりました。

いくつかの家庭や施設を訪れて、地域のお葬式に住民が揃って参加することを知りました。家族で音楽や踊りを楽しみ、人々が母語に誇りをもち、仕事以上に人とのつながりを大切にする様子も目にしました。そうした日常の積み重ねの中から、社会をより良くしたいという意識が育まれているのだと気づきを得ました。実際、バングラデシュでは若者が政治や社会の仕組みを変えようと声を上げる動きもあり、その存在は国の未来をつくる大きな力になっていると思いました。経済的に発展した国々では薄れつつある「目に見えない豊かさ」が、ここには確かに残っていると強く印象づけられました。

さらに、都市部を歩くと、新しい商業施設や建設中のビル、街を行き交う多くの若い労働者の姿が目に入りました。市場では活気ある取引が行われ、携帯電話やデジタルサービスを利用する人々の多さからも、経済の変化と成長のスピードを感じました。こうした光景は、統計や報道だけでは捉えきれない現地の実態を示しており、人々が未来に向けて前進しようとする力を裏付けるものだと考えました。

この経験を通して、経済成長やインフラ整備といった数値だけで国の発展を測ることはできないと改めて感じました。人々が生活に誇りをもち、家族や地域を大切にしながら「社会を良くしたい」と自然に考える雰囲気は、統計には表れない大きな力だと理解しました。開発学を学ぶ立場として、外部からの支援だけではなく、現地の人々が持つ主体性や意識こそが持続的な発展を支えるのだと学びました。

開発学は、制度や支援を設計するだけでなく、人々の主体性をいかに尊重し、活かすかを問い続ける学問です。その視点から見れば、今回出会った人々の自信や誇り、そして教育現場の熱気や経済の活気は、単なる文化的な特徴ではなく、未来を切り開く力そのものでした。今後も様々な地域や国について学ぶ中では、現地の人々の価値観や意識を理解し、それを発展につなげる姿勢を大切にしていきたいと考えています。

バングラデシュでの10日間

山梨英和大学3年 森田七星

バングラデシュで10日間過ごして素敵だと思ったところは、みんなが助け合って生きているところです。リキシャに乗っていてぬかるみにはまって動かなくなったとき、近くにいた男性たちがリキシャを後ろから押してくれました。一度だけでなく別の場所でも近くにいたバングラデシュの人々に助けられました。

BDPスタッフの方も、雨の中傘をさして学校に向かう時、私の小さい傘とスタッフの方が持っていた大きい傘と交換してくれました。自然に誰かを助けたり優しくすることができるバングラデシュ人の美しい心を見習いたいと強く思いました。

BDPスタッフの方々との思い出は、ベンガル語も英語も通じない私に、諦めずに沢山話しかけてきてくれたことが一番印象に残っています。私も拙い英語と少ししかできないベンガル語の単語で会話をしましたが、伝わらなくても話したいという気持ちを受け取り、とても嬉しかったです。また、食事係の女性との間や、仲良くなった子供達との間に確かに意思疎通ができて心がつながった瞬間が何回かありました。その時の喜びは絶対に忘れないです。このことから、言葉が完璧に伝わらないからといって外国の方とのコミュニケーションを諦めることはしたくないと強く思いました。

宿舎での生活は、トイレに行くのも、水浴びをするのも、洗濯するのも一つ一つ覚悟が必要で、大変でしたが、日本にいたら絶対に経験することのない生活をできたので、この経験ができて良かったと思います。最終日は体調不良者が増えてクーラーのある部屋で一夜を過ごしましたが、10日間この快適な部屋で生活していたら、バングラデシュの生活、人々への理解は遠のくものだったと思います。

また、蒸し暑く湿度が高い気候なので、お化粧をすることや日焼け止めを塗ることなど、日本での生活通りにいかないことだらけでした。化粧してもすぐ汗をかいて落ちてしまうし、汗で常に体が濡れているので日焼け止めを塗る気になれませんでした。なので、私は美容を全て諦めて生活したのですが、それはそれで心地よく、自分らしく過ごせたように感じます。

また、どんな体型でも美しく見えるサロワカミューズやサリーといったバングラデシュの民族衣装が私は大好きになりました。学校訪問で出会った女性たち、街にいる女性たちの服装は、ほとんどがサロワカミューズかサリーを身に纏っていました。原色の衣装にキラキラのспанコールがついたスカーフが輝いていてとても美しかったです。美しさとは何かを考えながらずっと女性たちを見ていました。

インターネットで、遠く離れた国の事も画像とともに知ることができる時代だけど、実際に訪れてみないとわからないことだらけで、バングラデシュに行って本当によかったと強く思います。自分の周りの人にバングラデシュという国や良さについて伝えたいです。

バングラデシュで知った優しさ

国際基督教大学 2年 吉澤茉央

共愛で過ごした中高6年間、口を開けばバングラデシュの話が止まらない荒谷先生をはじめ、現地でのユニークな経験を伺う機会が沢山ありました。そんな環境の中で、いつしか私の人生設計の中には「バングラデシュスタディーツアーに参加すること」が加わっていました。

バングラデシュを訪れて、特に印象深かったのは彼らの人柄です。訪問する小学校や、町ゆく人、もちろんBDPスタッフも、彼らのまっすぐな笑顔が忘れられません。バングラデシュを訪れて目の当たりにした彼らの当たり前は、私たちの当たり前と異なり想像を超えるものばかりでした。電球のない中勉強したり、職業訓練校を出ても良い職が見つからなかったり、お肉を頂くにも冷蔵庫のない暮らしをしていたり、映画を見るためにお店までくだしたり、信号のない道路でクラクションを鳴らしてすれすれで追い越したり、1つ1つ理解しようとするといつかなくなりそうな日々でした。確かに日本よりも発展していないことだらけ、それでも彼らのことを可哀想だと思ふことは一度もありませんでした。それはきっと、彼らが自分たちの国に誇りと自信をもって、他者に笑顔と優しさを見せてくれたからです。私は、優しさとは強さだと思っています。他者に心を寄せて、他者の強さだけでなく弱さも受け入れて、共に生きていくことは簡単なことではありません。しかし、彼らはたとえどんなに小さい子どもでも心が豊かでした。その源はどこにあるのでしょうか。私は、彼らが家族やコミュニティで、また知らない人同士で、外国人のためにでも協力するところをととても尊敬しています。私たちがバングラデシュの生活スタイルにフィットするのが困難なとき、嫌な顔一つせずきめ細やかな配慮をしてくれたり、一緒に解決の道を考えてくれたりしたあたたかさには感銘を受けました。彼らは、この地で生活していく中で、お互いに心を寄せ合って強さと弱さを補い合い、豊かな心を育んできたのではないかと思います。優しさの循環は、彼らが尊厳を尊重し合える環境になっていき、彼らの豊かな心をつくっていました。そして私もその輪の中に入れてもらえたことで、多くの気づきがありました。共生といえば、今回のスタディーツアーでテゼを訪問できたことは特に嬉しかった経験でした。テゼは、短くてシンプルな讃美歌を何度も繰り返し歌っていく中で他者と響き合い、心が溶け合っていくように感じます。文化は異なる人たちとでも同じときを共有し、共に歌えたことは糧になりました。帰国してからもテゼを歌うときはいつも思い出して、パワーをもらっています。

中学生の頃「貧しい人たちは幸いである」という言葉に胸を打たれてからこれまで、思い描いていたことは叶わなかったことばかりで、なぜバングラデシュ行きたいのかも曖昧になっていました。しかし今思い返せば、スタディーツアーに参加できたことが何よりも豊かな収穫になったと思うことができます。彼らの優しさと笑顔に囲まれて過ごした10日間は、他の何にも代えられない貴重な経験になりました。帰国後、日常の喧噪の中で彼らのように心に余裕を持ち他者と丁寧に向き合うために、小さな心の温もりを大切にするとところから始めています。スタディーツアーに関わってくださったみなさん、ありがとうございました！

2度目のスタツアで気づいたこと

学習院大学一年 小久保諒子

私は今回のスタディーツアーは2年前の高校2年生のとき以来となる2回目の参加となった。また同じところに行けることがいい経験になると思ったのと前回のスタディーツアーがなんとなく消化不良だったことが今回の主な参加理由だった。前回参加し、高校の学校説明会でスタツアのことを何回か話す機会があったが、その度に伝えたい事はたくさんあるのに伝わらない事に苦しんだ。今回は自分のスタツアに参加する意味とは、日本に帰ったら何ができるのかそんなことを探したそんなスタツアであった。一番印象に残ったのはネトロコナでの4日間である。ネトロコナの4つのBDPスクールに訪問した。天井が壊れ雨漏りしている学校、川のすぐ隣にあり遠くからだと島のように見える学校、電気が通ってなくて天井のファンや明かりがなく暗い学校、全てが衝撃的だった。ネトロコナの子どもたちは初めて見る日本人に戸惑っていて、緊張しているように見えた。おそらく外国人というのは未知の存在であっただろう。日本もそうだが田舎だと就ける職業が少なく、将来の夢を持ちにくいというのがあるがそれに似たような雰囲気を感じた。今回の訪問を通して、ネトロコナの子どもたちに日本という国がどこかにあって顔立ちや肌の色が違う人間がこの世界に存在することを知ってもらえて、少しでも彼らの視野や価値観が広がったらなと自分勝手に考えた。2日目の夕方にさつまいもの料理に4人の午前中訪問した小学校の子どもたちが来てくれた。最初は言葉も通じないためお互い戸惑っていたが、一緒に折り紙で少し難しいコマを折ったことでなんだか打ち解けられた気がする。3日目の朝に2日目に訪問した小学校の子どもたちが何人か来てくれて、シャボン玉をやった。最初は誰もやりたがらなかったけど、だんだん私もオレもみたいにやりたいやりたいとなり、2日目の訪問は子どもたちと打ち解ける時間が足りなかったのかなと考えた。こういうことが私がスタツアに参加したことの意味の感じる時間だった。私はバングラの現状や現地の生活を知ることや子どもたちと遊ぶなど素晴らしい経験をすることができBDPの子どもたち側は日本人がくることで世界が広がる。私が受け取ったことの十分の一でもいいから、訪問した小学校の子どもたちにプラスの体験のお返しができていたことを願っている。

あと2回目のスタツアに参加して嬉しかった事はやはり人の再会であるBDPのスタッフの方々はもちろん、2年前にインスタを交換し、メッセージをとり続けていたラハジさんの姪っ子さんと再会することができた。これは複数回参加者の特権である。その女の子は私にブレスレットなどのお土産や料理を作ってオフィスまで持ってきてくれた。彼女はたぶん英語がそんなに得意ではないことから事前に英語で手紙を書いてきてくれた。とても感動したし、嬉しかった。カルチャーショーの日にも会いに来てくれて、その子はとてもヘナタトゥーを描くのが上手なので念願のヘナタトゥーをしてくれた。めちゃくちゃ上手で改めて彼女の腕前に驚くのと同時に言葉の壁はあるけど彼女とは友達だし、また会えて、わざわざ会いに来てくれて本当にうれしかった。来てよかったなと感じた。改めて子ども達と遊ぶ楽しさ彼らの輝きやバングラデシュの人たちの暖かさを感じると同時に、虫や暑さに耐えられない自分などの至らなさを感じた2回目のスタツアとなった。

インターネットでは知り得なかった世界

東洋英和女学院高等部 2年 神津心咲

バングラデシュに到着したのは深夜だった。深夜にも関わらず人で溢れた空港、大型の銃を抱えた警備員、見慣れない景色に震えつつも、これから何が始まるんだろうとワクワクしながらバングラデシュの生活は始まった。そして、翌日からは、もっとたくさんの驚きと発見が待ち受けていた。

授業やニュースで、世界の様々な国について知る機会がたくさんある。その中で私は、その国に住む人達は、今現在、どのようなところに住み、何を食べ、どんな事を話しているのだろう、と思いを馳せることがよくあった。アメリカや韓国などに行ったときには、環境は想像通りで、日本と似た点も多かった。そのような中、新しいことを知れたらいいな、という思いでこのスタディツアーに参加したのだが、その結果は、想像以上のカルチャーショックの連続で、これこそ私が見たかった世界だと、一人心が踊った。

到着した翌日の朝、鶏の鳴き声で目覚めた。探さなくてもどこにでもたくさんいる牛や鶏と、それを日常として生活しているバングラデシュの人々。空き地でサッカーをしている男の子たち。半屋外というのだろうか、オープンなお店に集まって、コーヒーを飲んだり、テレビを見たりしているおじさんたち。私がいた世界とは、全然違う時間が流れていると思った。小学校に行くと、子どもたちが外で待っていて、私達を花や花吹雪で迎えてくれた。一生懸命に授業を受けていた子どもたちの姿を見て、学校に通い、勉強ができるのは当たり前ではないのだ、ということを初めて心の底から理解できた。バングラデシュの人々の温かさは、ずっと私の心に残っている。毎日食事はどうか、体調はどうかと気にかけてくださったBDPのスタッフの方々はもちろんのこと、子どもたち、先生、近所の人、お店の人、通りすがりの人、みんな温かかった。私にヘナタトゥーをやってくださった方は、とても時間をかけて丁寧に凝ったデザインを施してくださった。小学校で出会った子どもたちは、握手を交わすと、とても嬉しそうにしてくれた。小学校に行くまでの、車が通れないほどがぬかるんだ道を、小さな男の子たちが、大人と一緒に、私達を自転車のついた台車に乗せて、泥だらけになりながら押してくれた。赤の他人で、見慣れない人間を、笑顔で歓迎し、言葉が通じなくても、笑顔を交わす。私にとってのバングラデシュのイメージは、彼らから受けた見返りを求めないおもてなしの心で満たされている。

たくさんのカルチャーショックの一方で、バングラデシュは日本とは全く違う世界だった、とは言い切れない。当たり前の事だけれど、人々はそれぞれの生活があって、仕事や学校に行く。女の子たちはスマホで自撮りが大好き。今まで交わらなかった世界が重なって見えた。私が想像していたよりも、世界って意外と狭いのではないかと、そう思うようになった。外国に行くのには何時間もかかるし、行った先にはそれぞれ違った豊かな世界が広がっている。けれども、思い切って行ってみると、どこの国の人も、みんな同じ人間で、今を生きている、ということを感じられるだろう。それは、世界中が助け合って発展していく中で、心に留めておくべきことだと思う。

グローバル化し、インターネットが主流になっている現代で、他国の情報を得るのは簡単だ。しかし、「知ること」、ネット上に溢れる偏見や差別を取り除いた本当のことを「知る」というのは容易ではない。SNS上で、バングラデシュの交通や、市場の動画が流れてきたのを見たときに、否定的な意見がいくつも見受けられた。なぜ彼らは、行ったこともないのに、一片の動画を見て、危険だ、衛生面が、、、などと言うのだろうか、と悲しい気持ちになった。私は、現地でみんなが、国を愛し、良くしたいという思いを持って、一生懸命に生活しているのを感じた。クラクションや、信号なしの道路、たくさんのものが並んだ市場、すべては、バングラデシュの人々にとっての生活する手段であり知恵であった。クラクションは、車を抜かすときだったり、カーブを曲がる時の合図。信号はなくても、譲り合うことで事故なく道路を渡る。日本に住む人から見ると、比べてしまい、不便そうなどと感じてしまうことも、それぞれの国が築き上げてきた文化や生活習慣だということを理解し合って、リスペクトの気持ちを持てたら良い。

ここまで書いてきたけれど、バングラデシュで過ごした日々は、とても濃いものだったのにもかかわらず、私の日常はどんどん上書きしようとする。自分が得た経験が、単なる思い出に変わらないよう、これから何を学んでいけばいいのか、考えていきたい。

むち

東洋英和女学院高等部 2年 高石紗宮

私がバングラデシュに降り立ったときにまず思ったのは、コワイ。でした。

無表情で身動きせずにこちらを睨んでくる人がコワイ。

にこやかに話しかけてきて、キャリーケースを探すのを手伝ってくれるかと思いきや、チップを要求され、お金を持っていないというと無表情になって去っていく人がコワイ。

本物のいかつい銃を持ってこちらを無表情で見えてくる人がコワイ。

それと同時に空港から出たときに見た、12時を超えていたにも関わらず柵の向こう側からこちらを無表情で見つめてくる大量の人に本当にショックを受けました。動物園のオリの中にいる動物になったかのような、檻の外から自分とは違う何かを見ているような。今まで行ったことのあるシンガポールやオーストラリアとはわけの違う全く別の惑星に降り立ってしまったのだと強烈に感じたバングラデシュ最初の1時間でした。

空港を脱出し、道路交通法など存在しないような道を進む車の窓から見える真新しい世界は、私の長旅の疲れを忘れさせるには十分でした。

しばらくして、水洗トイレ、ふかふかなベッド、快適な温度に設定されたエアコンとは無縁の拠点に到着し、私のバングラデシュ生活は、不安すぎる1日目を終えました。それから数日間。協会、マイクロファイナンス、そして寺小屋巡りを通じて、現地の方々と関わり、BDPの方々と家族のように楽しく会話し、学校の子供達と踊りや歌、そして大ウケのマジックショーを披露し、私はいかに自分が彼らに先入観を抱いていたかを思い知らされました。文化、食、肌の色、すべてが違って、私達は同じ地球上に生きる同じ人間である。そうわかってしまえば、もう私にコワイものなどありませんでした。

シャボン玉に目を輝かせて満面の笑みではしゃいでる子どもたちが愛おしい。

パンクした車を周りの人たちが押してあげている姿が力強い。

ミニ卵オムレツが好きだと言ったら、毎日三食一人二皿づつオムレツを提供してくれるようになったBDPスタッフの方々の優しさ。

すべてが新しくすべてが美しい、とても素敵な世界がそこにはありました。

私はこのスタディツアーを通して、無知であることの恐ろしさを知りました。バングラデシュの文化、宗教、人々に無知だったから、私は勝手な先入観でバングラデシュがコワイところであると思っていたのでしょうか。相手について無知だから、誤解が、喧嘩が、差別が、暴力が、戦争が起こるのだと考えました。同じ人間として相手を知り、理解することで、私達は真に平和な世の中を作ることができるのではないか。

バングラデシュにいかなければ気づくこともなかったかもしれない人生において大切なことを、学び、より深く考える機会を与えてくださったACEF、BDPのみなさま、そして一緒にツアーに参加したみんな。本当にありがとうございました。

追記：私が入院したときにずっと一緒にいてくれた柳原さん、本当にありがとうございました

落とし物はパスポート、拾ったのは未来

東洋英和女学院高等部2年 黒江美来

「バングラデシュスタディツアー」という言葉を見た去年の私は、とても運命的なものを感じた。なぜか分からないけれど、ビビッときた。しかし去年のスタツアは中止。今年ようやく念願の参加となり、ためらいはなく、むしろワクワクしかなかった。ただ、毎食苦手なカレーだったのは除いて…。そんな私の人生を大きく変えた旅を振り返る。

深夜、飛行機から降り空港に立つと、日本とはまったく違う世界が広がっていた。胸の高鳴りと少しの緊張。時が経つにつれ、バングラデシュは私の凝り固まった世界を広げてくれた。

私が訪れたのは、ネトロコナ。車で約8時間、皆とおしゃべりしているうちに着いた。学校訪問までの道のりで、大雨でぐしょぐしょの地面を踏みしめた足の感触は今でも鮮明に覚えている。厳しい環境に心が折れそうになり、何度も「帰りたい」と思った。学校訪問では濡れて泥だらけの裸足のまま教室に入った。教室の中まで水が入り込み抵抗を感じたが、子どもたちは気にせず授業を受けていて、「弱音は言っていられない」と思わされた。そんな不便な生活ではあったが、それ以上に楽しくて、ネトロコナ最終日には「また来たい」と思うほど楽しかった。

そんな中、私はパスポートを失くすという大事件を起こした。スタツアメンバーより長く滞在することになり、普段皆とワイワイ過ごしていただけに余計に寂しく、不安に押しつぶされそうで泣いた。現地では「バングラデシュに住んじゃう？」と冗談で笑わせてもらい、美味しい場所へ連れて行って奢ってもらい、日本で必ず返すと約束した。さらに、エビが好きだと言うとわざわざ買ってきてくれて、辛いエビカレーを作ってくれた。私はカレーが苦手なのにとっても美味しく感じ、あの味は忘れない。本当に楽しかった。

先が見えず不安な時、「問題ない！」と笑ってくれる人、一生懸命探してくれる人、寄り添ってくれる人がいた。そして、空軍への連絡や「何かあれば連絡してね」と声をかけてくれた日本大使館の方々に支えられ、私は無事帰国できた。前世でどんな徳を積んだのだろうと思うほど幸せ者だ。

行きは賑やかに皆と飛び立ったのに、帰りは一人ぼっちの飛行機。静かな機内で心配していたトランジットもなんとか乗り越え、未来の自分と進む道考えた。成田空港でゲートを抜けると両親が待っていて、張り詰めていた生活の糸がふっとほどけた。後で知ったのだが、日本大使館の方は到着までずっと運航状況を見守ってくださっていた。その姿に、私も他者のために寄り添い、愛をもって尽くせる人になりたいと強く思った。それが、私の憧れだ。

日本に帰ると、暑い夏、宿題や塾が待っていた。今でもふと「あれは夢だったのでは」と思う。そして気づいた。バングラデシュや国際協力に興味のない人には、どれだけ話しても響かないということ。悔しかったが、伝えることを諦めるのはもったいない。せっかくの素敵な体験をしたんだもん。どう伝えるか。それが私の課題だ。

スタツアメンバー、バングラデシュの方々、在バングラデシュ日本大使館の皆さん、本当にありがとうございました！パスポート紛失事件は「絶対また来なきゃ」という決意と「どんなことがあってもやっていける」という自信をくれた。バングラデシュでの経験は、人生をかけて挑みたい夢と出逢わせてくれた。この出逢いを絶対に忘れないし、高2の夏休みは濃くて忘れられない。スタツアで得たものを胸に、未来へ歩み続けたい。

今年度の夏のスタツアに参加できたことは、私の人生における財産だ。
私にとって超大切な場所、バングラデシュ。超愛してるよ！！

(後日談→パスポートはネトロコナにありました。お騒がせしてすみませんでした・めちゃくちゃ反省してます)

バングラデシュで出会った学ぶ力と私の決意

共愛学園高等学校 2年 為貝椎香

教室を開けた瞬間、私は息をのんだ。ひび割れた壁、古びた机と椅子、蒸し暑い空気の中で、子どもたちは汗をぬぐいながらも黒板に向かい、一心にノートを取っていた。その目には迷いがなく、ただ「学びたい」という強い意志だけが輝いていた。

授業後、何人かの子どもたちがたどたどしい英語で話しかけてくれた。「将来は先生になりたい」「家族を助けたい」と語る声は小さくても力強く、私の胸を打った。その瞬間、学ぶことの本当の意味を考えずにはいられなかった。日本では、冷暖房の効いた教室や整った教材、ネット環境に囲まれて学んでいる。しかし私は時に勉強を面倒に感じ、テストの点数に一喜一憂することもあった。あの子たちのまっすぐな姿を見ると、学ぶ意志こそが未来を切り開く力であることを痛感した。

学校を後にする際、ひとりの女の子が私の手をぎゅっと握り、「また来てね。あなたと話せてうれしかった」と言った。その手の温もりと笑顔は今でも私の心に深く残っている。たとえ短い時間でも、私たちは世界の誰かとつながれるのだと実感した。

帰国後、私は自分にできることを考えた。大きな支援はすぐにはできない。でも、「知ること」「伝えること」なら今すぐ始められる。友達や家族にツアーでの学びを話し、教育格差や貧困の現実を伝えること。そして、将来は国際協力や教育支援の分野で、子どもたちが安心して学べる環境をつくる仕事に関わりたいと思う。具体的には、募金活動や現地の学校支援プロジェクトに参加したり、学習教材を届ける活動に協力することから始めたい。

このツアーで学んだのは、国や環境の違いは壁ではなく、行動のきっかけになるということだ。バングラデシュの子どもたちのまっすぐな瞳を忘れず、自分の学びを誰かの希望につなげられるよう、これからも行動し続けたいと思う。

ACEFスタディツアー考 その4

ACEF事務局長 柳原さつき

今回のツアー参加者は、学生9名、リーダー、サプリーダー、そして事務局の計12名。今回は2チームに分かれて、Aグループはネトロコナに、Bグループはジャマルプールを訪問した。

ネトロコナは久しぶりのツアー訪問となり、今BDPスクールに通う子どもたちは、日本人を見たことがない子ばかりだったようだ。ミルプール、プーバイル、ジャマルプールのように、「また今年も！」と楽しみに待っていてくれる子どもたちとは一味違い、「この人たちは誰・・・？」と戸惑っていた子どもたちも多かったに違いない。それでも、ネトロコナチームメンバーの話を聞くと（私はジャマルプールチームだった）、過去にサイクロンで被害にあった学校を訪問したり、大雨の中メンバーに会いに来てくれた子どもたちとの出会いがあったりと充実した様子が伺えた。（この学校訪問をきっかけに、ACEFユースで後日校舎再建のためのクラウドファンディングを企画中。皆さんにもぜひご協力いただきたい！）

ジャマルプールでは、学校でも事務所でも、相変わらず歓待していただいた。土砂降りの中到着した学校では、途中からぬかるんで学校まで車が入れないということで、バアンで迎えに来てくれて、学校運営委員会の委員長が自らぬかるみにはまりながらバアンを押してくださった。学校には、コミュニティの人たちも大勢集まっていて、これはきっとこれまでずっと変わらない風景だ。これからもできれば変わらずにあって欲しいと思いつつ、日本側の制約のある状況の中で、子どもたちやコミュニティの人々の幸せのために変化すべきところとそうではないところを見極めなければと、改めて思った一場面だった。そして、事務所の方ではエリアマネージャーのモクレスさんが独自にジャマルプール滞在中のスケジュール表を作り、毎日3食のメニューまで詳細に書かれていて（！）、準備万端で迎えてくれた。今回はすごい気合いだな😓と驚きつつも、こちら変わらないホスピタリティに心から感謝した。

ところで、最近も「大人のスタディツアーはやらないの？」というお問い合わせをいただいた。来年2月にバングラデシュでは総選挙があるので年が明けてからは少し難しいが、来年度は企画したいな・・・と思案中、中身も色々検討中である。

MEMO

誰一人取り残さないために

ACEF 事務所

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-
18 日本キリスト教会館26号室

